

聖女の義妹に媚薬を盛られ獣人国に捨てられた結果、
愛が重めの夫たちに愛されています

プロローグ

「リディアーヌちゃん……愛してる」

「あっ、やつ」

背後から抱きしめる黒髪の男の手が、ベビードールを着たリディアーヌの胸を揉みしだく。

まるで正面にいる二人の男に見せつけるかのような手つきが、恥ずかしくてたまらない。

獲物を狙う獣のような二対の瞳に凝視され、リディアーヌは羞恥しゆうちで体がかつと熱くなるのを感じた。

そのうち、絶世の美女と見間違えそうな銀髪的美丈夫が、リディアーヌの顔に吐息がかかるほど近寄った。

「嫌だなんて言っつて。リディアーヌさんはいつまで経っても素直じゃありませんね。また一から教えましょうか？ ほら、舌を出してください」

「んっ」

口腔内をくまなく撫でるような、男の優しくも器用な舌。ぞわぞわとした快感が背筋を駆け上がり、ふると体が震える。

角度を変えて何度も落とされる深い口づけ。唇の柔らかい部分が重なり、遠慮がちに応えようとするリディアーヌの舌が優しく掬め捕られる。

背後の男はとろけるようなリディアーヌの顔を悔しそうに見下ろすと、胸の先端に手を伸ばした。「今日は俺の日なのに……ま、いっか。リディアーヌちゃん、次は一对一でしようね」

「まったく……これ以上、夫が増えないことを願ってるよ。女神のあられもない姿をこれ以上広められないだろう？」

上向きに主張する頂きをいやらしくこねられ、キスで口を塞がれながらぐもった嬌声を上げるリディアーヌに、最後の男が動いた。

「リディ。下の口がずいぶんはしたなくなったな。レースがびっしり濡れて透けてるぞ？」

「やあつ、言わないで」

「ほら、脚を閉じるな。今日はたっぷり時間をかけてかわいいがってやるからな」

ぐっと広げられた脚の間に、男の顔が埋まった。

「んーっ！ んっ、んあつ、だめっ！ んん——っ！」

男たちは乱れるリディアーヌに代わる代わるささやいた。

「リディ、愛しい妻」

「愛します、リディアーヌさん」

「かわいい奥さん。最初に誰の子を孕むか楽しみだね」

第一章

「あ、あの、リディアーヌお嬢様。その薬草は手がかぶれますから、私めにお任せください」

「大丈夫よ。あなたのその手では傷に染みてしまうでしょう？ ここは私がやるから、あなたは向こうのムーンリーフの採取をお願いします。ね？」

「お嬢様、私どもは奴隷なのですから、そのような情けをかけなくてよろしいですよ」

「そんなこと言わないで」

私に気を遣わなくていいのよ、と微笑むリディアーヌに、妙齢の女の下働きは眉尻を下げた。

地平線から朝日が昇り、紺碧の空が白む頃。

見渡す限り緑が覆うパナケイア家の薬草園では、太陽の光で葉が開く前の薬草を摘む作業が早朝から行われていた。

粗末な作業着に身を包む下働きの者たちに交ざり、歌いながら慣れた手つきで作業をする娘が一人。澄んだ美しい歌声は過酷な環境で働く彼らにとつて唯一の楽しみでもあった。

その歌声の主であるリディアーヌ・パナケイアの指先は傷だらけで、誰が見ても不遇な境遇にあることは明らかだ。

ごくありふれたこげ茶色の髪を簡単にまとめ、着古したワンピースにエプロン姿。愛らしいヘーゼルの瞳もぼつとりとした唇も、小汚い身なりに隠れて目立たず、名門パナケイア一族の血を引く娘だとはとても思えないだろう。

特殊な薬草もあるこの場所には、触れるとかぶれるものや棘があるものも多い。だからこそ、薬草園で働く労働者の多くは奴隷階級の者たちであり、本来リディアーナのような令嬢がいるべき場所ではなかった。

そのやり取りを遠巻きから眺めていた一人が、声をひそめて他の下働きに尋ねた。

「なあ、まさかとは思うが、あの人はここのお嬢様なのか？」

「あんた新入り？　そうさ、リディアーナ様はパナケイア侯爵家のお嬢様だよ」

「だけど、パナケイアの娘といえば聖女だろう？　確か淡紫の髪色をした美女じゃなかったかい？　あの方は茶色い髪だし、それになんだか……汚いじゃないか」

「しいつ！　あの方は前夫人のお嬢様だよ。現夫人は侯爵様の元愛人。貴族社会じゃよくある話さ」リディアーナは父が再婚した十歳の頃から、奴隷と変わらない生活をしていた。

父親には放置され、早朝に薬草摘みをしたあとは製薬作業を手伝う日々。本邸から離れた敷地内に別邸と呼ばれる住まいが用意されているが、もとは物置小屋だった場所である。リディアーナはここで十年間、たった一人で暮らしてきた。

現夫人が愛人として長年日陰で暮らし、先代夫人を憎んでいたというのが大きな理由ではあるものの、リディアーナ自身にも問題があるとされていた。

一族の落ちこぼれという烙印が押されているのだ。

父はことあるごとにリディアーナの全身を調べさせた。

「リディアーナにはまだ聖痕が現れないのか？　建国の時代から繁栄してきたパナケイア侯爵家は、女神から癒しの力を授かった由緒ある一族だ。あいつに聖痕が浮かばないと王族との約束が……」頭をかきむしる父親。

だが、どれだけ調べてもリディアーナに聖痕が浮かび上がることはなかった。

「代々、強い聖力を持つ女性がその世代に一人生まれると言われるのになぜだ……？　王族や高位貴族に嫁ぐことで家門は繁栄に繁栄を続けてきたのに、なぜ俺の娘には現れないんだ！」

「あなた。娘はリディアーナちゃんだけじゃないわ。クリスティーナだっているじゃない」

パナケイア侯爵家に現夫人が八歳のクリスティーナを連れて移り住んだ翌年、義妹の右手の甲に聖痕が現れた。

こうして、嫡女であるリディアーナは、あつという間に薬草園へと追いやられたのだ。

（私は聖痕もない役立たずだから、少しでも家業に貢献しないと）

癒しの力を与えられたクリスティーナは聖女と呼ばれている。神秘的な淡紫の髪色やその美貌も相まって世間の人気は高く、この国では女神のような扱いだ。

今は主にあちこちの儀式に女神として登場し、王宮で王子妃教育にいそしんでいるらしい。

つまり、癒しの力を使う機会はない。

（聖女がこの世のすべての人を治癒することは無理なもの。それなら、象徴的な立場にいるのは正

しいのかもしれないわ。だけど、パナケイアには薬草がある。癒しの力がなくても、薬があればきつと助かる人はいるはずよ」

パナケイア侯爵家を作る薬はよく効くと評判で、人気も高い。

さらに、王家からの依頼で特別な薬の製造も任されている。パナケイア家の敷地内では、毎日二種類の薬が大量に作られていた。外部に漏れないよう厳重に管理されているこれらの薬は、外貨を得るための貴重な外交カードとして輸出され、この国に多大な利益をもたらしているようだ。

パナケイア家の娘として薬を作ることで貢献できれば——妹のような癒しの力を持っていない分、リディアーヌは薬作りを自分の使命だと思うようにしていた。そうしなければ、パナケイア一族に生まれた自分の存在意義を見出せなかったのだ。

家族よりも一緒に過ごしてきた下働きの中には移民も多い。言葉が話せない者にはこの国の言葉を教え、具合の悪い者にはリディアーヌがこっそり薬草を調合した。たまたま通りかかった本邸の使用人による密告で、薬草の使用が継母の耳に入った時は、背中を何度も鞭打ちされたこともある。もちろん、下働きの者たちも優しいリディアーヌを大切に思っていた。

身内が罪を犯したことで連座となった者や、政敵や商売敵に陥れられて奴隷に身分を落とされた者。彼らの中に才能豊かな者がいたことは、リディアーヌにとって大きな力となった。

教養のある下働きたちはリディアーヌに生きる力や常識を教えたのだ。リディアーヌは初潮のことも、男女の関係についても、すべて彼らから教わった。

「いずれ体が発達してくると周囲の男性たちから向けられる目が変わるでしょう。いいですか？

できる限り、性的な目で見られないように自衛するのです」

きつとどこかの貴族の家で高い身分にいたか、あるいはそこで働いていたであろう女性の下働きが、リディアーヌにそう教えてくれた。だから、なるべくみずばらしい格好をし、興味を持たれないように気をつけている。

下働きも新たに雇い入れられ、人の入れ替わりがあるから、身を守るために神経を尖らせなければならぬ時もある。それでも、今の生活をリディアーヌはそれなりに気に入っていた。

人の役に立つ製薬に携わりながら、このまま穏やかに暮らしていければ、それでよかったのだ。

食事は一日二回。パンとスープ、気まぐれに出るおかずが一品あるかどうか。質素な内容は、リディアーヌも同じだった。下働きに交ざって朝食をとり、お昼ごろに簡単な休憩を挟んで夕方まで作業を行う。

その日の昼休憩も薬草園の脇にある木陰で多くの下働きが居眠りをしていた。

一人の幼い下働きがリディアーヌにねだる。

「リディアーヌ様、何かお歌を歌って？」

「いいわよ。みんながぐっすりお昼寝できるように、子守唄がいいかしら」

——夜空に浮かぶ星たちよ

——君の瞳に映る光

—— 出会いの奇跡、恋の魔法
—— 永遠に続く愛の調べ

リディアアーンは亡くなった母親の影響で歌が好きだった。母が嫁ぐ時に持ってきた珍しいピンクダイヤも、リディアアーンのお気に入りだった美しいエメラルドも、数多あった宝石の類はすべて継母に奪われてしまったが、教わったたくさんの曲が思い出とともに頭の中にある。

透き通るような声が辺り一面に響くと、疲れて昼寝をしていた下働きたちの口元が自然とほころんだ。染み渡るようなその歌声は、まるで体の中の疲れを癒し、活力を与えていくよう。畑の薬草も、どこかうれしそうに揺れているような気さえしてくる。

その時だった。

パチパチと拍手をする音がし、下働きたちが一斉に飛び起きた。

彼らの視線の先には高貴な身なりの青年の姿があった。

「リディは相変わらずの美声だね」

「っ、第二王子殿下……」

「そんな他人行儀に呼ばないで？ 僕たち、幼馴染じゃないか。昔のようにアデルって呼んでよ」
アデルがリディアアーンに近寄ると、下働きたちは慌ててその場から立ち去った。離れたところにアデルの従者がいるが、木陰には二人きり。

（困ったわ……こんなところ、誰かに見られでもしたら……）

顔を背けるリディアアーンにアデルが近寄った。

「リディアアーン。まだご家族から虐げられているんだね。……君のこともなんとかするから、もう少しだけ待っていてくれ」

「おやめください。もう、薬草園には来ないでください」

「リディアアーン……わかってくれるだろう？ 僕だってどうしようもなかったんだ。婚約者が君からクリスティーナに代わったのは不可抗力だ」
「存じています。ですから、婚約者がいる身でこんなふうに来られると困ります」

「リディアアーン……」

アデルはすらりとした細身の体躯で、まるで役者のようだと言性たちの間で評判らしい。リディアアーンも使用人たちの噂で耳にしたことがあった。長めのくすんだ金髪をかき上げる仕草がたまらないと評判で、切れ長の目や高い鼻筋がクールで素敵なのさそうだ。

そんなアデルの華やかな容姿と王族というステータスに、義妹のクリスティーナは夢中だった。もしも、リディアアーンの元をアデルが訪ねたことを知ったら、何をされるかわからない。

「お願いします……早く行ってください」

「……わかった。だけど、僕は君のことを諦めないからね」

微笑み去っていくアデルを見送りながら、リディアアーンはなんだか嫌な予感がした。

悪い予感的中し、リディアアーンがバナケイア侯爵邸の本邸に呼ばれたのは、翌朝のことだった。

いつものように薬草を摘んでいたリディアーヌを、本邸から来た護衛騎士が強引に連れていく。その扱いは乱暴で、本邸に行くのなら身なりを整えさせてほしいと言っても聞く耳を持ってくれない。

結局、両脇を抱えられたリディアーヌは、作業中の薄汚れた格好のまま侯爵邸へ足を踏み入れることになった。

歴史的な価値のある石像や塔なども現存し、まさに生きた歴史館のような豪華な屋敷。数年ぶりに本邸へ足を踏み入れたリディアーヌは、家族が揃う朝食の席へ連れていかれ、その場へ乱暴に押し出された。

「あっ！」

足がもつれてその場に倒れ込む。その拍子に右足首をひねったようだ。痛みをひそめ、立ち上がれずにいると、義母である侯爵夫人が汚らしいものを目にしたように顔を歪めた。

「まあ。久しぶりに顔を見せに来たと思ったら、挨拶一つ、まともにできないの？ それにしても汚らしくて臭つてきそうね……食欲が失せたわ」

侯爵夫人はカトラリーを置くと席を立ち、侯爵の肩に優しく手を置いた。

「あなた、行きましょう？」

「……ああ」

お父様、という言葉は口の中に消え、リディアーヌは久々に見た父親の背中を目で追う。

幼い頃からかわいがってもらった記憶はほとんどないが、リディアーヌが聖なる力を受け継がな

かったのだから、仕方がないと自分に言い聞かせてきた。だからといって、一瞥することなく立ち去った実の親の仕打ちは、慣れたとはいえ傷つかないわけではない。

クリスティーナだけが座るダイニングルームは静まり返り、リディアーヌは床に座ったまま。壁際に控える使用人たちは嫡女を視界に入れることもなく、手を差し伸べようと動こうともしない。それぞれの立場を暗に示しているようで、リディアーヌは惨めだった。

緊張感が漂う中、怒りのこもった声が冷たく響く。そこには『鈴を転がすような声』と評判の美声は影も形もなかった。

「……それにしても、汚らしい。お義姉様、恥ずかしくないの？」

不機嫌さを隠さないクリスティーナが、リディアーヌに鋭い視線を向ける。

美しい淡紫色の髪にサファイアブルーの瞳を持つ義妹。

完璧なバランスで配置された大きな瞳が印象的なクリスティーナは、童顔で少女のような可憐さがある。だが、ひとたびリディアーヌに敵意を向けると、口汚く罵るのが常で、外見と中身がまったく一致しない。

「癒しの力を持たないうえに、汚らしい格好で奴隷と薬を練る役立たずが、私の婚約者に色目を使うとはね……恥を知らないさい！」

湯気の立つティーカップを手に立ち上がったクリスティーナ。彼女がその中身をリディアーヌにかけようとしているのは明らかだった。

無意識にひゅっと喉が鳴る。あの中身を顔にかけられたら、最悪の場合、失明することだってあ

り得る。

「や、やめて、クリスティーナ……」

カツカツと近づくと、聖痕が浮かぶ右手でリディアーヌめがけてティーカップを投げつけた。

「きゃあっ！ 熱いつ！」

とっさに顔を覆った両手に熱い紅茶がかかる。袖口は茶色いシミとなつて湯気が立ち上り、リディアーヌの白い両手を赤く染めた。

「ふん、大げさね。その顔をずたずたにしてやりたいけど、あんたにも使い道があるかもしれないからダメだつてママが言うし、このくらいで許してやるわ。でもね、リディアーヌお義姉様」

クリスティーナはパチンと閉じた扇子でリディアーヌの顎を無理やり上げる。

サファイアブルーの瞳に、怯えるリディアーヌの姿が映った。

「もしもまたアデルに近づいたら、その顔をナイフで切り刻んでやる。ふふっ。癒しの力で治して、また傷つけて。何度も何度も終わることのない苦しみをあんたに与えてやるから覚悟しなさい」

「っ……」

リディアーヌが恐怖でガタガタ震える姿によりやく溜飲が下がったのか、クリスティーナは使用人に義姉を外へ連れていくよう指示をした。

ほっとしたリディアーヌだったが、いつまたクリスティーナに攻撃されるかわからない。この様子ではアデルと偶然すれ違っただけで咎められそうだ。

（今日はこのくらいで済んでよかったわ……クリスティーナとアデルの結婚が整ったら、そのタイ

ミングで私のことは修道院に送ってもらおう）

アデルとリディアーヌの婚約が結ばれたのは、物心がつく前だった。

ところが、待てど暮らせどリディアーヌに癒しの力が発現せず、妹のクリスティーナに現れたことで婚約が結び直されたのだ。今から十年前のことである。

パナケイア侯爵家からの申し出だったと聞く。王家も、まるで季節の移ろいのように姉妹の立場を入れ替えた。アデルも、特に異を唱えることはなかったそうだ。

（仕方がないわ。王家だつて聖なる力を持つ王子妃が欲しいはずだもの）

だから、リディアーヌも納得したのだし、できればもう放っておいてほしかった。

裕福なパナケイア侯爵家の愛娘の座を降ろされ、下働きと変わらない生活をさせられている今、元婚約者にこんな姿を見られるのは惨めだった。それなのに、アデルは無遠慮に距離を詰めてくる。彼は、パナケイア侯爵家にリディアーヌの扱いを抗議することもない。

リディアーヌとの接触を知ったクリスティーナがどういう態度を取るのかを知っているうえで、日和見の傍観者でありながら、どこか氣遣うような素振りを見せるアデル。その曖昧な優しさに、リディアーヌの信頼はとうの昔に消えていた。

（早く、二人が結婚して王宮に住んでくれたらいいのに……）

華奢なクリスティーナはいつまでも少女のようで、十代前半に見える愛らしさだが、彼女だつてもう十八歳だ。それなのに、なかなか婚約から先に進まない。

同世代にはすでに結婚式をあげた令嬢もいるし、クリスティーナも焦っているのだろう。ここ最近のイライラは特にひどい。今は少しのけがで済んでいるが、いつか取り返しのつかない嫌がらせをされそうで、リディアーナは不安だった。

逃げ出すことも考えた。けれど、手元には何も無い。お金も、役立つ知識も、未来を切り開く術も。将来への不安を抱えながら、リディアーナはただ、目の前の一日を生きることで精一杯だった。

その日、仕事を終えたリディアーナは、敷地の奥にひっそりと佇む泉へと足を運んだ。

ここは先祖代々伝わる秘密の泉。鬱蒼とした木々を抜け、苔むした洞窟の奥にひっそりと息づいている。家族も使用人も近づかない、リディアーナだけの隠れ家だ。

周囲に人の気配がないことを確かめてから、洞窟の中へ進む。

手にしたろうそくの灯りが、湿った空気の中で小さく揺れる。奥へ進むと、夜光石が泉の底で淡い緑色の光を放っていた。

リディアーナは静かに衣服を脱ぎ、生まれたままの姿になった。

きつく巻いていた胸のさらしを外すと、抑え込んでいた息がふっと漏れる。

ムクロジの実で髪と体を洗い、冷たい泉に腰から下を沈めた。

——ポチャン

久しぶりの禊だ。ひんやりとした水が肌を撫で、澄んだ空気が肺の奥まで満ちていく。まるで心の澱まで洗い流してくれるようだった。

（両腕が赤い……今日は軽い火傷と足首の捻挫だけで済んでよかった。傷の治りは早い体質だから、きつとすぐに薄くなる）

リディアーナは目を閉じ、天井の闇を仰ぐ。自然と口元から歌がこぼれた。

——風が運ぶ君の声

——遠い記憶に包まれて

——君の笑顔、君の涙……

清らかな水が、リディアーナの足首と赤く腫れた腕を癒してくれる気がした。その時だった。

「……リディ？」

「きゃあっ！ 第二王子殿下？ ここは一族以外立ち入り禁止ですよ!？」

アデルだ。リディアーナは胸を隠すように腕を交差し、声がした方へ背中を向けた。

（見られた？）

羞恥で全身がカッと熱くなる。首から上と手首以外、異性に肌を見せたことはない。医者にだって十歳以降はかかったことがないのに。

アデルは申し訳なさそうに言う。

「だが、君の義妹と結婚するんだから一族の一員になるといつて語弊はないし、足を踏み入れる権

利はある。地図をもらったから敷地内を探索してみようと思ったんだが、まさかこんな場所が……」
ひそひそとした声が聞こえる。どうやら一人ではないようだ。

少なくとも二人以上の異性にこんな姿を見られていることにリディアーヌは絶望した。
恥ずかしくて情けなくて、涙があふれてくる。

「うっ……っ……」

屋敷の中で暮らせれば、リディアーヌだって泉で裸などしない。だけど、住まいとして与えられた家には風呂がなく、体を洗う水だって無駄にはできない。普段は簡単に清拭だけで、時々ここに来ることを楽しみにしていたのだ。それなのに、まさか他人が足を踏み入れるだなんて。

慌てたような空気が広がり、アデルの焦った声がした。

「あつ、すまない。私たちはもう出ていくから、ゆつくりするといい。念のため、誰も入らないように部下を入り口に立たせておくよ」

「……」

そういうとアデルは泉を後にした。

耳を澄ませて判別できたのは二人の足音。従者と一緒だったのだろう。

人の気配がなくなったのを感じるや否や、リディアーヌは急いで衣服を身につけ、走って洞窟を後にした。

——泉で裸をしてから数日後。

仕事を終え、小屋で寝る支度をしていたリディアーヌの元へ、侍女たちを引き連れたクリスティーナがやってきた。ノックもなく蹴破られたドア。大きな音に驚き、リディアーヌの肩が跳ねる。

「ク、クリスティーナ？ どうしたの……？」

ツカツカと近づいたクリスティーナは力の限りリディアーヌの頬を叩いた。

パンツという乾いた音。顔が右へ大きくはじかれ、頬がじんじんと熱を持つ。

「……っ」

「泥棒猫！ あんたがアデルのことを物欲しそうに見ていたのは知っているんだから！ 浅ましくも縫い付くなんてっ！ このあばずれがっ！」

「痛っ！ や、やめて、髪を引っ張らないで……」

「……アデルが、アデルが、あんたの裸を偶然見ってしまったから妾めかけにするって。私の結婚と同時にあんたのことも引き取りたいってお父様にお願ひしたのよ。色仕掛けをするなんて、よくも……！」

「違うわ！ 私、そんなことしてないっ！」

クリスティーナは怒りで頬が紅潮している。今は何を言っても耳を貸しそうもないが、そもそもリディアーヌの言葉を聞くともない。

侍女たちはリディアーヌにずっと近づくと、その両腕をしっかりと押さえた。

「やめて、何をするつもり!?」

「この家のお荷物のかせに、王族のアデルを狙うなんて身の程知らず！ 存在していること自体が間違いのよ。修道院に連れていったところで、優しいアデルが連れ戻すに決まっているし、本当

に厄介な女っ！ だけど、心配しないで？」

クリステアーナが目配せすると、侍女たちがリディアーナの口を無理やりこじ開けた。目の前に差し出されたのは、美しい細工のガラス瓶。中でタプタプと怪しげなピンク色の液体が揺れている。リディアーナの頭の中に警鐘が鳴り響く。絶対、飲んだらダメなやつだ。

クリステアーナはガラス瓶のキャップを開けると、その香りを嗅ぎ、うつそりと笑った。

「残念ながら聖女と呼ばれる以上、お義姉様に直接手をかけるわけにはいかないわ。苦しい思いをさせるのは忍びないし……ふふふつ。悶え死ねばいい」

「んうつ、んうつ！」

甘ったるい香りの液体が口の中に広がる。とろみのある甘い液体をなんとか吐き出そうと思ったが、侍女たちが両脇から鼻と口をふさいでせいで、飲み込むしかなかった。

喉がこくと鳴る。クリステアーナは残酷な笑いを浮かべた。

「ふふっ！ あーはっはっはっ！ その体でアデルを誘惑しようとしたんでしょ？ ご自慢の体で最後の夜を楽しむといいわ。さようなら、お義姉様」

頭に袋を被せられ、リディアーナは抱えられるようにして馬車へと運ばれていった。

夜の空気は冷たく、どこか遠くで犬の遠吠えが響く。

リディアーナは、暗闇の中で小さく震えていた。

それから、どれくらいの時間が経ったのかはわからなかった。

いつの間にか意識を失い、リディアーナが再び目覚めた時は、森の中で一人だった。

(ここはどこ……？)

体を起こし、身をかがめ、注意深く辺りを見渡す。

鬱蒼とした森はピクニックで気軽に訪れるような場所ではないようだ。ましてや、屋敷の中にあるよく手入れされた散歩道とも違い、人が通りそうな気配もない。馬車が通れるような道もなく、リディアーナをここまで運んだ人物も、獣道を通ってきたことが一目瞭然だった。

(わざわざ、ここに私を捨てたかったって……？ まさか、ここって獣人国へつながる迷いの樹海なんじゃ……)

人間国と相いれない獣人国は、百年以上前に起こった戦争により袂^{たもと}を分かち、迷いの樹海をお互いの境界として国交を断絶している。獣人というのはおとぎ話のような存在だが、総じて悪役である。

その姿は異形で、毛みれの顔には動物と同じ耳があり、口は裂けて鋭い歯が並ぶのだとか。人間よりも二回り以上体が大きく、野蠻。かぎ状の爪に引つかかれるだけで人間は呆気なく絶命してしまうらしい。

万が一獣人に掴まったら、急所を突かれ体の自由を奪われた後、逆さづりにされゆつくりと殺されたり、生きたまま肉を剥がされたりするとも聞く。

獣人にまつわるさまざまな黒い逸話を聞いた日、幼いリディアーナは恐怖で眠れないほどだった。

(——残酷な噂であふれる獣人に遭遇してしまうかも)

リディアーヌは身震いした。迷いの樹海は、人間なら物心つく頃には「何人たりとも生きて帰れない」と教わる場所でもあるのだ。

（クリスティナは、私が獣人に最も残酷な方法で殺されることを望んだんだ……）

涙は出なかった。だけど、心の中の何かが壊れた気がした。

空を見上げると明るい。日中のようだが木が生い茂り、森の中は薄暗かった。これからどうしたらいいのか、どうするべきなのか、わからない。このままここで野垂れ死ぬのだろうか。

それよりも胸が痛いほど脈打つことが気になった。高熱を出した時のように体が熱い。

（こんな時に熱が……ううん、弱気になっちゃダメよ。どこかで体を休めて、まずは熱を下げないと命取りになる）

リディアーヌはあてもなく歩き始めた。

「ふうっ、ふうっ、……、熱い……」

熱を下げる野草はどれだったか。足元に目を落とすと視界がぼやけてきた。肌が汗でじっとりとしり、気持ち悪い。熱のせいなのか、自分の体ではないようなふわふわした感覚がある。

「んっ、……んうっ」

寝る直前で寝巻替わりのワンピースを着ていたため、コルセットもつけておらず、ワンピースの下はショーツだけ。動くたびにワンピースが肌に触れくすぐったい。体の奥が疼き、股の間がしつとりしてきたのを感じる。

（これ以上動かない方がよさそう。なんだか体の調子がおかしい）

その場にしゃがみこみ、木にもたれる。自分の体を抱きしめるように腕を交差させると、胸の先端がこすれて甘い吐息が漏れた。

「あっ」

体が疼いてたまらない。リディアーヌは自慰について教わったことがなかったが、体のどこが疼いているのかははっきりとわかった。

（もう我慢できない……疼いているところを触りたい、体の中をかきむしりたい）

服の上から両胸を揉み、指でいじる。リディアーヌの細い指では持て余すほどの重みだ。上下左右に荒々しく揉んでも、一向に疼きは収まらない。

やがて、指先が偶然胸の頂点をかすめた。

「あっ、ここ……」

さっきもこのあたりが刺激されて声が出たことを思い出す。自分の胸を見下ろしながら、ワンピースを押し上げる突起を指で触ってみた。

「あっ、き、気持ちいい……」

指でこね、つまんだり、押しつぶしたりしているうちに、夢中になって先端をいじっていた。

（ああ、物足りない……お腹の奥が、うずく……）

膝を立ててスカートをたくし上げ、脚を広げてみる。ショーツがびっしり濡れているのが自分でわかった。

片手で胸の先端をいじりながら、もう一方の手で恐る恐るショーツの上に手を伸ばしてみた。

そこは触れるだけで体がとろけそうで、全身がびくびくと震えてしまう。だけど、手のひらですつたり揉んだりしても、うずきは止まらない。頭がどうにかなりそうだった。

ああ、そういえばクリスティーナは「悶え死ね」と言っていたと思い出す。

こういうことだったのかと腑に落ちた。

「やあ、ふつ、つらい……どうしたらいいの……うう」

恥ずかしい姿でどこなく自慰を続けてみるも、リディアーヌの体はますます熱を持ってしまう。そのとき、カッカツと鉄同士がぶつかるような音が聞こえてきた。

「ん？ な、なんだあれ」

「うっわ、えっろ！ こんな森の奥で自分を慰めてんの？ 痴女？ 痴女なの？」

「何プレイなんでしょう。放置プレイ？ 襲われ待ちでしょうか？」

甲冑をまとった三人の男が呆気にとられた様子で、こちらを凝視している。

大柄な男たちは騎士のようで、兜を脇に抱えながらリディアーヌの様子をうかがった。

「いやっ、見ないで！」

こんな痴態を見られるなんて、正常な頭だったら死んでしまいたいと思ったはず。けれど、今のリディアーヌの頭の中は完全に焼き切れており、ただこの体の疼きをどうにか収めなければ、本当に悶え死にそうだった。

口では嫌言いながらも手が止められない。男たちに見せつけるかのように、片手は主張する頂きを、片手は濡れた下着の上を一心不乱にいじってしまう。見られていると思ったら、疼きがずん

と深くなった。

（やだ、私ったら変態みたい……こんなの、私じゃない）

そう思うのに、胸と股の間をいじる手を止められない。頭と体の意思が繋がらず、自分の体ではないみたいだ。恥ずかしくて涙が出てくる。

「この甘い匂い……危険な香りがしますね」

「発情香を混ぜた媚薬か？ お遊びにしているはずいぶん悪質な薬を使っている。入手ルートを調べた方がよさそうだ」

「はい、トバイア様。くっ、普通のやつなら理性がすり切れますね」

男たちは悩まし気に額を突き合わせると、まずは自慰にふける痴女と話してみようと相談した様子。警戒した様子の一人の大男がリディアーヌに近づいてきた。

サイドを刈り上げた白金髪に濃紺の鋭い目と高い鼻梁、それに男らしいシャープな面立ち。

太い首が甲冑の間から見え隠れする二十代半ばほどの男は、かなり体格がいいようだ。事実二メートル近くありそうな大きな体は威圧感がすごい。

「あー、俺は第一騎士団団長のトバイア・ボンドだ。攻撃はしない。だから、君も落ち着いてこちらの質問に答えてほしい」

「は、はい……んう」

息も絶え絶えに答えるリディアーヌに、トバイアは驚いた表情を見せた。リディアーヌは恥ずかしい姿をさらしているのはわかっていても、手を止められない。

彼に従う他の男性たちは、おそらく部下なのだろう。髪型が違うだけで、まるで双子のようにそっくりな二人だ。

「えーっと、もしかして夫たちにここで自慰行為をするように言われているのか？ お楽しみのところ申し訳ないが、その発情香は違法な媚薬だ。少し話を聞きたいのが夫たちはどこに……おい、大丈夫か？」

リディアーナは首を左右に振る。肩で荒い息をし、涙を流しながら胸と股をこすり続けた。何をしても楽にならず、気が狂いそうだった。

「んう、ふっ、熱いの、た、たすけて……、ん、ぐすっ、もうやだあ、うう」

「ん……？ 夫たちの姿が見えないが、まさか一人で遊んでいたのか？ それとも、発情香で引きつけて乱交しようと待ち構えていたとか……ではない？」

「ふう、んっ、薬っ、飲まされてっ、んっ、はあ、っらいっ、っらいの」

ふむ、と後方から観察していた栗色の髪の青年がもしかして、と口にした。

「媚薬を飲まれたってことですか？ ひどいですね。この匂い、かなり悪質な組み合わせですよ」

「それにしても下手くそな自慰だな。やったことがないのか？ どうします、トバイア様」

「うん。どうするって言ったって……これ、っらいだろうに。でも、この女、自分でイけるのか？」
リディアーナはもどかしさで頭がおかしくなりそうだった。

男たちがいくつか案を出しあう様子を朦朧としながら聞いていると、トバイアが近づいてきた。

「んー、君、それじゃあ永遠にイけなさそうだから俺が手伝うよ。あいつらにも見えてほしい？」

「わかんないっ！ ぐすっ、っらいの……」

「あー、じゃあ性的興奮を高めるために協力させるか。おまえら、そこに座って見ていてくれ」

彼の指示を聞き「了解です」「喜んで」と部下らしき男たちが座る。

トバイアはさて、とリディアーナに向き直った。

「じゃあ、まずは指示を出すから従ってね」

トバイアはガチャガチャと甲冑を脱ぐと、シャツにトラウザーズ姿の軽装になった。

リディアーナをひよいと抱き上げ、背中を自分の胸に預けるように脚の間に座らせる。

そして「じゃあ」と言うや否や、おもむろにワンピースを引き裂いた。

「きゃあっ！」

「ボロボロだし、あとで代わりの買ってあげるよ。じゃあ、ちよつといじわるするけど、ごめんね」
そう耳元でささやくと、トバイアの雰囲気さがらりと変わった。

「君はいやらしい体をしているね。大きなおっぱいに、……ああ、綺麗な乳輪だ。薄桃色の先端が固くなっているじゃないか。ほら、見ていてあげるから、自分で先っぽをいじってごらん」

「え？ は、はいっ……こ、こうですか？ あっ」

「そうそう、上手だねえ。爪でカリカリすると気持ちいい？ こっそり脚をすり合わせて……そこももどかしいんだろう？」

「ふっ、ん、んっ、ど、どこ？」

「……ごほん。ほら、下穿きを脱いでこっちに貸すんだ……うわあ、びっしり。スンスン……甘

酸っぱい、いやらしいメスの匂いをするな」

脱ぎたての下着に鼻を押しつけるトバイアを見て、リディアーヌは気絶しそうだった。恥ずかしくて仕方がないのに、下腹部がずくと疼く。

「やだっ、下着を嗅がないで！」

「ほら、こうやって脚を広げるんだ」

「ああっ！」

トバイアの太ももに両膝を乗せられ、強制的に脚を開かされる。体格差がある分、リディアーヌの脚は限界まで開かれた。ごつごつとした大きな両手がリディアーヌの両脇から伸び、秘部を左右に広げられるとクチュツと音がした。濡れそぼったそこがすすうし、余計に疼いてしまう。

「ほら、自分で触ってみて。人差し指を伸ばして臀むたの間を上下に……そう、指で蜜をすくって……上手だ。もつと上……その辺にあるだろう？ 気持ちいいところが」

トバイアに言われたとおりに指を動かすと、今までとは段違いの快感にぶち当たった。何かしこのようなものがある。

「あっ！」

「見つけたか。そこだ、そこ。わかりやすく左右に広げてあげるよ。ほら、それをこすってみて」

「ああっ！ 気持ちいい！ んんっ、おかしくなるっ」

「おかしくなっているぞ。ほら、もうちよつとだ。おっぱいの先っぱのかりかりも忘れるなよ」

「あん、あ、あっ」

「……ほら、目を開けて。あつちを見てごらん。君の恥ずかしい姿、見られているぞ」

はつとしたリディアーヌの視線の先に、男が二人、あぐらをかいてこちらを見ていた。

一人の男は笑顔で舌なめずりをし、リディアーヌの羞恥心を煽る。

もう一人の男は薄笑いを浮かべながら「えろいですね」と口をパクパクと動かした。

こんな痴態を見られたことに感情が高まり、下腹部がひくひくと蠢うごめく。体の奥がしびれ、じわつと何かが溢れた気がした。

（あっ！ お、お漏らししちゃったかも……！）

真つ赤な顔で泣きながら荒い息をするリディアーヌを、トバイアがじつと見下ろし首を傾げた。

「……まだダメか？」

「今、軽く達したっぱいっすね。やっぱ、中でいった方が早いんじゃないっすか？」

「うーん、まだ発情香の匂いがありますね」

「自慰じゃラチがあかないな……本当は精を放たないとならないが、そこはこの人の夫に任せよう。応急処置として、とりあえず何回か達せば一旦は落ち着くだろうし。うーん……仕方ない」

トバイアはリディアーヌの胸と股間に手を伸ばすと、耳元でささやいた。

「非常事態なので少し触るぞ？ 頭が真つ白になりそうだったら、イクって言うって教えてくれるか？ 今から俺がイかせてやるからな」

背後から回された男の指が乳房に食い込んだ。人差し指と中指の間に胸の先端が挟まれ、ゆつくりと乳房を揉まれる。柔らかな乳肉が縦横無尽に揉らされるたび、指の間に挟まれた薄桃色の実に

も甘い刺激が送られた。

そのうち、芯を持った胸の尖りを指できゅっと引つ張られ、弾かれた。リディアーナはたまらず天を仰ぐ。

「あつ、き、気持ちいい」

「よかった。だけど胸じゃまだイケないだろうから、下でイこうか」

胸を弄んでいた手が股の間に伸びると、つぶっと太い指が泥濘ぬかるみに侵入した。

「あつ！」

ドロドロになった隘路あいろは、はしたない音を立て始める。

溢れた蜜がお尻を伝って垂れ、トバイアまで濡らしてしまいうさだ。

「あの、わたし、きやあつ！」

「ほら、集中して？」

トバイアは胸の尖りをつまんでいた手を離すとリディアーナの花芽を探り当て、蜜をまとった指の腹を優しく押しつけた。大きく分厚い手からは想像できない繊細な動きに、たまらずのけぞる。

「あつ、ダ、ダメー！」

ぷつくりと赤く充血した花芽を執拗に責められ、リディアーナは頭を左右に振って髪を振り乱す。だが、背面にいるトバイアに四肢を絡めるように固定され、体を自由に動かせない。

快感を逃がせず下腹部に熱がこもっていく中、リディアーナはパニックになっていた。与え続けられる巧みな性戯に嬌声が止まらず、高みから下りられない。

「ああ、見てごらん。健気に勃起して。愛らしいね。そろそろイきそうだね」

「ああ！ もう、ダ、ダメツ！ んっっ！」

その瞬間、リディアーナの視界が白く弾けた。

ぴんと張ったつま先と充血した秘部を確認し、トバイアは再び熱い泥濘へ指を沈めた。休む間もない責めに、リディアーナの思考はとろけてしまう。

「ああつ」

「念のため、中イキもしておこう。それにしても狭いな……とりあえず、ほぐす時間もないから浅いところでイっておこうか。ほら、顔をこっちに向けて」

「んむっ」

トバイアは、振り返ったリディアーナの華奢な顎を押さえ唇をむさぼった。ぼつてりとした唇をはみ、舌を差し込んで口腔内を蹂躪する。そして片手の指は泥濘に差し込んだまま、秘芽の裏辺りを探るように指の腹で優しくこすり始めた。

上と下でちゅぷちゅぷと水音を競うように、その音が大きくなる。リディアーナがびくんと大きく体を揺らしたポイントを見逃さず、トバイアは責め立てた。

淫らな音が大きくなり、リディアーナに再び絶頂の波が押し寄せる。

涙を流しながら首を左右に振ろうとするが、固定されて動けない。トバイアはリディアーナの言葉を飲み込むように舌を吸い、離さないままだ。

蜜口に差し込まれた太い指はリディアーナのいいポイントを責め立て、その快楽は気が狂うほど

だった。大きな波が近づき、リディアーヌはくぐもった声でイクと何度も訴える。
(もうダメっ！)

「ん〜！ ん〜！」

リディアーヌは目の前が真っ白になった。

トバイアは指先に感じる収縮を堪能した後、ゆっくりと指を引き抜いた。ちゅぱつと音を立て、ぼつてりと腫れた唇からも離れる。

「ふう、頑張ったな。どう？ 疼きは収まっただろう？ ん？」

「団長、多分気を失いましたよ」

「ええ？ やり過ぎたか？ だけど、この子」

クンクンと三人の男が脱力するリディアーヌの体臭を嗅ぐ。

「……発情香は汗にまみれて消えましたが、この子、処女香がしますね」

「ええ？ 処女が外を出歩くんなんて、まずいな……保護しないと危険だ」

「とりあえず、連れて帰るしかないっすね」

トバイアは自分のマントを外すと、リディアーヌをそっと包み、大切そうに抱きかかえた。

第二章

(ここは……)

リディアーヌは目を覚まし、見慣れない天井をぼんやりと見上げていた。壁紙は温かみのある暖色系で、部屋にはマホガニーの重厚な家具が並んでいる。どれも年代物のようだが、丁寧に手入れされていて高級そうだ。まるで貴族の家の貴賓室のようだった。

体がだるく、頭もすっきりしないまま視線を動かすと、自分がふかふかの布団に包まれていることに気づく。こんなしつかりしたベッドで眠るのは十年ぶりだ。思わず安堵のため息がもれた。

「気持ちいい……」

「夢の中でもイってるのか？」

「えっ!？」

人の気配はなかったのに、とリディアーヌは驚いて体を起こした。

「だ、誰？」

「トバイアだよ。覚えてる？ 君に自慰を教えて、手でイかせた第一騎士団長」

「あつ……、はい。その節はどうも……」

あのときの快楽がよみがえる。ベッドサイドの椅子には、腕を組んだトバイアが座っていた。あ

の指で胸や下半身を弄られたことを思い出し、一般的な令嬢と変わらない貞操観念を持つリディアーナは、顔を赤らめて俯く。

媚薬は抜けたというのに、トバイアの手を見たら、また下腹部が疼いたのだ。

そんなリディアーナを見て、トバイアが首を傾げた。

「もしかして、あの程度で恥ずかしがってる？　よくわからない女だな。とりあえず、名前は？」

「えっと……、リディアーナ……です」

家はもう捨てたのだから、苗字は言わなくていいだろう。パナケイア侯爵家は有名過ぎるし、下手に名乗って能力があると期待されても困る。リディアーナは加護をもらえなかったパナケイア家の落ちこぼれなのだから。

「リディアーナか。聞きたいことは山ほどあるんだが、とりあえずここは我が家だ。取り急ぎ、俺のシャツを着せた。君の服は俺が破いたから、今買いに行かせている」

「あ、はい……」

見下ろすと、清潔な白いシャツを着せられていた。胸の先端に直接シャツが触れ、股がシートに直接触れていることに気づき、慌てて上掛けを引き上げる。

「本来は騎士団の拠点に連れていきたかったが、君のその香りで発情する者がいそうだから、うちに連れてきた次第だ。それで、君は今いくつなんだ？　なぜ、まだ処女でいる？」

「え？」

（騎士団の取り調べって、そんなことまで尋ねるの？　もしかして媚薬には年齢制限があるのかし

ら。それにしたって恥ずかし過ぎる……だけど、トバイア団長はお仕事で聞いているんだから、正直にお答えしないと困らせるわよね）

リディアーナは硬い表情でぐくりと喉を鳴らした。

「今年、二十歳になりました。婚約者もいませんし、結婚もまだなので、いまだ処女です」

「二十年も生きてきてて処女だと……？　すごいな。どこかの宗教で守られていたのか？　処女信仰なんて聞いたことがないが、生贄か何かか。それなら無垢なのも納得だが……？」

トバイアがぶつぶつと呟くの聞きながら、リディアーナは恐る恐る尋ねた。

「あの、トバイア団長、ここはどのあたりなんですか？」

できれば、パナケイア侯爵家のある場所からうんと離れていることを願う。もし隣接する領なんていう近きなら、一刻も早く遠くへ行った方がいい。ここにすることが知られたら、団長にも迷惑がかかるかもしれない。そのくらいの力をパナケイア侯爵家は持っている気がする。

だけど、そのためには、お金を稼がなくてはいけない。仕事も家も探す必要がある。まずは状況を把握しようトリディアーナはぎゅっと拳を握りしめ、トバイアの返答を待った。

「ここ？　ああ、王都の我が家だよ。どこか目的地があるのか？　どちらにしても、そんな処女香をまき散らしながら外に出るのはおすすめしないな」

「処女香？」

聞きなれない言葉だが、トバイアはリディアーナから香ると言っているようだ。

年上の女性からいろいろ教わったが、処女に香りがあるなんて聞いたことがない。もしかして個

人差があつて、たまたま自分だけ匂いがするのだろうか。

困惑するリディアーナを見て、トバイアは首を傾げた。

「どうも君と話していると何かがずれてるんだよな。種族のせいかな？　ちなみに、君は何族なんだ？」

「……種族とは？」

「まさか、自分の種族を知らないのか!?　混血で両親がわからないとしても何かの拍子にこう、うん。……ええ？　わからないなんてことがあるのか？」

頭を抱えてしまったトバイアに、リディアーナも混乱する。きちんとした学校も通っていないし、家庭教師に何かを教わったこともない。もしかしてリディアーナが知らないだけで、みんな何かに所属しているのだろうか。

「あの、トバイア団長は……？」

「俺？　犬族」

（イヌ？　あの犬？　つまり……）

リディアーナは頭の中が真っ白になった。つまり、それは獣人ということではないのだろうか。ということは、ここはラグランジュ王国ではなく獣人が住むエクランド王国で、自分はある森から家とは反対側へ連れてこられたのかもしれない。

リディアーナはそろりとベッドから降りると、トバイアを警戒しながらゆっくりと扉へ後ずさりした。

（四肢を切り刻まれるのも、生きたまま内臓を開かれるのも嫌。逃げなきゃ……）

リディアーナがじりじりと後退する姿に、トバイアの雰囲気が変わる。

「……何か都合が悪いことでも？」

「や、こ、来ないで……」

どのみち逃げられないことはわかっている。ここから出られたところで獣人に囲まれ、爪で切り裂かれ、まるで玩具のように転がされるのだろう。

逃げ場のない恐怖にガクガクと足が震え、涙が止まらない。

「え？　なんで泣くんだよ。善意で助けてやったのに、何が気に障ったんだ？」

「うっ、わ、わたしを、切り刻むんでしょ？」

「は？　君を？　俺はシリアルキラーではなく、騎士団長だと名乗ったはずなんだが」

「だって、獣人は、ひっく、に、人間を殺すって……、わたし、人間だから……」

「人間だと!？」

その瞬間、トバイアは椅子を倒しながら立ち上がり、わずかに数歩でリディアーナの前に立ちはだかった。首元に顔を近づけ、耳の裏を嗅ぐように鼻を鳴らす。

「スン……嫌な臭いはしないのに……おかしいな」

「ひいっ！　お許しくださいお許しください！　殺さないで刻まないで！」

リディアーナは腰を抜き、崩れるように座り込んだ。

トバイアはため息をつき、うずくまったリディアーナの前にしゃがみこむ。

「人間は獣人についてずいぶん言い方をしているとは知っていたが、本気で信じているんだ

な……で？ 君が教わった獣人の特徴は？」

「ぜ、全身毛まみれで、ひっく、獣と同じ耳があつて、く、口が裂けていて……」

「俺の顔はどうだ？」

指の間からこわごわと顔を上げると、そこには精悍なトバイアの顔。人間でもここまで整った男はめったにいない。意志の強そうな太い眉や、鋭いあごのラインが男らしさを感じさせる。

「すごく、かつこいい……です」

「だろ？ ほかに？」

「人間の二回り以上の大きさで、爪は鋭いかぎの形で獲物を罅る……」

「まあ、体が大きいのは確かだが、爪は普通だぞ。君のいやらしい穴に指を入れてゴシゴシしたじゃないか。気持ちよかつただろう？」

「っくっく！」

リディアーヌが真つ赤になると、トバイアはあははと笑った。

「で、獣人に何をされるって教わってるの？」

「……もしも捕まったら、四肢を切断されて、ゆっくり弄ばれながら殺されるって……」

「ずいぶんと野蛮な話だな……あのな、そもそも獣人を誤解している。まず、姿かたちは君たち人間とほとんど変わらない……普段はな。ただ、三大欲求に関しては本能が強いから、少し種族の特徴が出やすいけど」

「そうなんですか？」

「ああ。もし君の言う通りなら、出会った瞬間に罅ってるよ。玩具にしてくれといわんばかりに、股を広げて淫らに誘っていたじゃないか」

「あ、あれは、不可抗力で……」

確かに、よくよく考えたら、出会った時から一貫してトバイアは氣遣つてくれている。媚薬による欲を発散させるときも無理やりなことはせず、痛いこともされなかった。クリスティーナにされてきたことの方が、よっぽど残酷ではないだろうか。

そう考えた時、リディアーヌはまだトバイアにお礼を言っていないことを思い出した。

「あの、いろいろ誤解していたようです。ごめんなさい。それから、助けていただいて、ありがとうございます」

「まあ、仕事でもあるから。それで？ なんで人間が混沌の森にいたんだ？ 人間は怖がつて立ち入らないだろう？」

「あそこ、混沌の森というんですね……」

リディアーヌは事情を簡単に説明した。自分は何もできない役立たずで、義妹の婚約者に色目を使つたと誤解され、媚薬を飲まれ捨てられたことを話す。

トバイアは真剣な表情で話を聞くと、リディアーヌの手元に視線を落とした。

「苦勞したんだな。手を見ればわかる……なあ、これからどうするんだ？ 戻つたところで悲惨な目に遭いそうな気がするんだが」

「できればあの家には戻らず、どこかでひっそり暮らしていきたいんです。寝る場所と仕事を確保

すれば、一人でなんとか」

「は？ どう見ても世間知らずな君が一人で暮らすなんて無理だろう？ 獣人より人間の方がよほどしたたかだぞ？ 騙されて売られて、ひどい目に遭うと断言できるんだが」

リディアーヌも不安しかない。しかし、パナケイア侯爵家に戻ればアデルの愛妾にされ、針のむしろのような日々が待っているのは明らかだ。だから、あの家から逃げるには、誰も自分を知らない土地でひっそりと暮らすしかない。

「……どんな状況でも、あの家に帰るよりは、幸せに暮らせるはずです」

悲壮感漂うリディアーヌにトバイアは眉尻を下げる。

「うーん……まあ、ラグランジュ王国に送ってやるのは構わないけど、君が飲んだ媚薬は相当悪質なものだ。風紀にも影響があるから、完全に抜けきるまで経過を見させてくれ」

「……は、はい」

「よし。それじゃあ、とりあえず風呂に入って体を清めるといい。一人で入れるか？ 手伝ってもいいぞ？」

「い、いえ、使い方だけ教えていただければ」

「そうか。じゃあ、こっちに來て」

トバイアに案内されたバスルームは広く、数人がかりで世話をする大貴族向けの豪華な造りだった。一人で入るにはもったいないほど大きなバスタブには、すでにお湯が張られている。蛇口を捻るとお湯が出てくる仕様で、温かいお湯で体を洗えることにリディアーヌは喜びを隠せなかった。

湯船に浸かるのは実に十年ぶりだ。

湯気が立つバスタブに足を入れると、冷えた指先からじわじわと熱が広がった。トバイアに使うように言われた石鹸はフローラルの香りで、どう見てもリディアーヌのために用意された新品に違いない。

（こんなによくしてもらったこと、あったかしら。何も知らずに獣人のことを怖がって、悪いことをしてしまったわ）

ゆっくり湯船に浸かり、バスローブを羽織って髪をタオルで乾かしていると、ノックの音がした。

「え？ トバイアさん？ ちょ、ちょっと待ってください」

「違いまーす、部下でーす」

ガチャリと入ってきたのは、森でトバイアと一緒にいた双子だ。

「っ！ まだ入っていいって言ってるな」

「自慰してるところも、秘所まで見たのに。今さら何を恥ずかしがってるんだか」

「……そ、そうだけど」

そんなあからさまに言われたら、悔しいやら恥ずかしいやらで涙が滲んでくる。リディアーヌだって好きで痴態をさらしたわけではなかったのに。

下唇を噛み、瞳を潤ませるリディアーヌに気づくと、双子の片割れが大きなため息をついた。

「ほら、着替えを買ってきたぞ。一人じゃ支度できないだろう？ 手伝うから」

「……着られます」

「マジ、こいつめんどくさいよお、チェサ」

「まあ、そう言うな、ダグ。……トバイア様が食事を一緒に取ろうとおっしゃってます。お待ちですから、急ぎましょう」

「きゃっ！ やだっ、脱がさないで！」

二人がかりでバスローブを剥ぎ取られたものの、双子はリディアーヌの裸には興味がない様子。目の前で揺れる乳房には目もくれず、連係プレイで手際よく服を着せていく。

ドレッサーの前に座らされ、髪を結い、化粧を施されているが、なんとも落ち着かない。

生まれて初めて化粧をするからだ。

「おまえ、いくら女だからつても少し手入れするべきだぞ。肌が乾燥しきってんじゃねえか」

「ダグの言う通りですよ。お手入れすればするほど自信にも繋がります。あなただって、綺麗でいたいでしょう？」

「あ……お手入れもお化粧もしたことがなくて……」

「は？」

頭上でチェサとダグと呼び合う二人が顔を見合わせる様子を、リディアーヌも鏡越しに見つめる。なぜそんなに驚いているのかわからないが、年頃の娘のくせに手入れをしていないだなんて、怪訝に思っているのだろうか。生きていくのに必死だったのだし、そんな余裕はなかったのだから仕方がない。改めて二人を見ると、彼らも整った顔をしている。栗色の髪を一つ結びにしたのがチェサ、ハーフアップにしているのがダグ。凛々しい眉に丸い瞳、鼻筋が通った丸顔で、甘いマスクの童顔

イケメンだ。少年っぽさを残す彼らは、もしかしたらリディアーヌより若いかもしれないが、体はかなり鍛えていそうだ。顔と体の印象にギャップがある。

それでも、リディアーヌとさほど年は変わらないだろう。弾力がありそうな肌は、触らなくても一目瞭然だ。若いからという理由だけでなく、きちんと手入れもしていることを感じさせる。

甲冑を着ていたし、騎士なのかもしれない。そんな男性たちがリディアーヌよりも艶やかな肌であることが情けなかった。

「おい、なんで涙ぐむんだよ。つたく、さつきからめんどくせえ女だな。人間ってみんなこういうのか？」

「やめなさい、ダグ。何か気に障ったのなら、申し訳ありません」

「ち、違うんです……ずっと生きるのに必死だったから、手入れもおしゃれもしたことがなくて……自分が情けなくて、ひつく、恥ずかしくて……」

「……は？ 着飾ったこともねえってこと？」

（呆れられてる。恥ずかしい）

泣き顔を見られるのが嫌で両手で顔を隠そうとすると、両脇から手が伸び、その手をピタッと止められた。チェサとダグがリディアーヌの両手をそれぞれ掴んだのだ。

「……はあ。人間っていうのは世知辛いんだな。元の素材がいいんだし、これから着飾ればいいじゃんか」

「ダグの言う通りですよ。ほら、せっかく渾身のメイクをしたんだから、泣かないでください」

チェサが優しく布をあてて涙を拭き、崩れたメイクを手早く直すと、リディアーヌに鏡を見るよう耳打ちした。

「あ……」

そこには目元を少し赤くした儂げな美女——リディアーヌがいた。

ベルスリーブでオフショルダーの柔らかなブラウスにティアドスカーートを重ね、コルセット型のベルトでウエストを締めてある。貴族令嬢というより、裕福な町娘のような装いだ。アップにされた髪にはスカーフをカチューシャのように使い、華やかさがある。

素肌を生かしたメイクにはリディアーヌ自身も驚いた。平凡なヘーゼルの瞳は長いまつげに縁どられた奥ゆかしい宝石のようだし、ふっくらとした唇は瑞々しい果実のようだ。整えられた肌は乾いた土台に潤いが満ち、内側から発光しているような艶が生まれていた。

「私じゃないみたい……」

「おまえ、ほんとに汚らしかったもんな。つ、口が滑った。わ、悪い」

「ううん、本当のことだから、大丈夫。さつきは私こそ、ごめんなさい。あの、チェサさんとダグさん……？ 着飾ってくれてありがとう」

「これも仕事ですから。さあ、トバイア様の元へ案内します。お腹が空いたでしょう？」

そういえば、最後に食事をしてから丸一日は経っていることに気がつく。空腹を意識したことで、リディアーヌのお腹がくうつと小さく鳴った。真っ赤になったリディアーヌにダグが苦笑する。

「くくつ、ほら、行くぞ」

てっきりダイニングルームに案内されると思っていたが、双子に連れてこられたのはエントランスホールだった。すでにそこにはトバイアの姿。

白いシャツにトラウザーズを穿いたトバイアも、一見すると平民のような服装だ。しかし、精悍な顔立ちと、服の上からでもわかる逞しい体つきのせいで、どう見ても普通の人には見えない。

そんなトバイアはリディアーヌに気づくと目を見開いた。

「ほう。ずいぶんとあか抜けたじゃないか。どれ、そこで一周回ってごらん」

「こ、こうですか……？」

リディアーヌがぎこちなく一回転すると、トバイアは目を細めて頷いた。

「へえ。喘いでいる姿が愛らしいと思ったが、こうして着飾ってもかわいらしいな」

「えっと……」

（お礼を言うべきなんだろうけど、なんだか素直に言いづらいわ）

顔を真っ赤にして俯くリディアーヌを見て、トバイアはうれしそうに微笑んだ。

「こんな言葉で赤くなるなんて、人間ってうぶなんだなあ。さあ、せっかくだから獣人の街を案内するよ。外で食事でもしよう」

トバイアに連れてこられた街は、リディアーヌが知る人間の街と何ら変わりがない。

メイン通りには生活に欠かせないさまざまな店があり、路地を入れば飲食店や飲み屋が所狭しと並ぶ。トバイアによれば、高級店は少し離れたエリアに密集していて、ここは庶民向けの店が多いらしい。広場に立つマルシェを横目に通り過ぎると、トバイアがリディアーヌの手のひらに指を絡

めてきた。

(あ……)

トバイアの大きく熱い手に、リディアーヌの心臓が跳ねる。男性とこんなふうに接するのは初めてだ。薬草園では下働きの人たちに手当てをしたことはあるが、それはあくまで治療のためで、今回のような意味合いとは違う。

異性と初めて手をつないでドキドキしているなんて口にすれば、トバイアや双子は「裸だっけ見たのに何を?」「いやいや、あそこも触ったじゃないか」なんて言いかねない。

平常心を保とう、つないだ手の感触はなるべく考えないようにしようと思口を引き結んでいると、トバイアが振り返った。

「チェサとダグもいるが、万が一はぐれたりしたら危険だ。念のために手をつなぐけど気をつけて」「つ、は、はい……」

そう言ったトバイアは辺りを見渡し、警戒している様子。チェサとダグまでもビリビリしている様子に気づき、リディアーヌは不思議だった。

(治安もよさそうだし、平和な感じなのに。狭い路地裏なんかは意外と危険なのかしら。それにしても、人間の世界とほとんど変わらないのに、体格は全然違うのね)

噂に聞いていた「二回り以上の大きさ」というのは少し大げさだが、それにしても皆大きい。そう思った時、ふと気がついた。

「……あれ? 女性が、いない?」

(どういうこと? 店員さんも男性だし、歩いている人も男性。女性はどこにいるの?)

トバイアの案内を聞きながら周囲を観察してみても、やはり男性しかない気がする。それに、やたらと注目を集めているように感じるのは、自意識過剰なのだろうか。

(見かけない顔だからジロジロ見られているのかしら。それとも、トバイア団長と一緒にだから目立っている?)

トバイアの行きつけのレストランだという店に入るとチェサが店員に何かを伝える。すぐに個室へ案内され、一行はようやく一息ついた。

ここは庶民がカジュアルに楽しめるレストランのようで、テーブルや机が並ぶホールの奥に、お目当ての個室があった。ゆったりとした広さがある個室は、大きなテーブルの周りに六脚の椅子。

窓はないが絵画が飾られ、ホールに比べると格調が高い。この部屋は特別な上客が使うのだろう。「ここなら人目を気にせずに済むだろう? おすすめをいくつか頼んでみるから、試してみて。君はお酒は飲めるのか?」

「えっと、飲んだことはありません」

「そうか。じゃあ、甘くて酒精が強くないものを試してみるといい。無理はするなよ」

トバイアが慣れた様子で注文し、チェサとダグも同じテーブルにつかせる。

次々と運ばれてくる料理に目移りしながら、リディアーヌはほっとした。どんな料理が出てくるのか不安だったが、どれもおいしそうだ。その顔を見て、トバイアが笑う。

「今にもよだれをたらしそうだ。さあ、さっそく食べよう」

新鮮な野菜を使ったサラダに、巨大な塊肉のステーキ、レッグ付きの甘い唐揚げ、トリュフが香るクリームパスタ。ホットパイやビッグソーセージなど、テーブルの上はすぐにいっぱいになった。三人は綺麗な食べ方なのに食べるスピードが速く、あっという間に料理が吸い込まれていく。その様子を見て、リディアーヌもフォークに刺した肉にかぶりついてみた。

「……おいしい！」

「だろう？　ここは味つけが抜群なんだ。酒はどうだ？　無理ならジュースを頼むといい」

カクテルグラスに入れられた赤い色のお酒はベリー酒なのだという。

甘酸っぱい香りを楽しみながら一口飲んでみる。

「甘くておいしいです！」

「ははっ、よかった。でも、酔い過ぎないようにな」

「はいっ」

お酒が進む濃い目の料理に、リディアーヌもつい酒をおかわりしてしまう。

「おいおい、大丈夫か？　もう四杯目だと思うが」

「あいっ、らいじょうぶです！」

今まででこんなに心地よかったことがあるだろうか。お腹いっぱいにおいしいものを食べ、綺麗な服を着て、特別な部屋で食事を楽しんでいる。それに、お酒もとてもおいしい。

ふふふっと楽しそうに笑ったリディアーヌにトバイアは一緒に笑い、ダグは舌打ちし、チェサは無表情でその姿を眺めていた。

「トバイア団長」

「ん？」

「なんかあ、獣人の国って、いいですね。トバイア団長はあ、優しくてえ、食べ物もおいしい」

「ははっ、そうだろう？」

「あいっ。だけどお、女性を見てないような、うーん、いたかも……だけど、スカートを、穿いた人が、いなかったような」

トバイアはうん、と両手を組んで俯き、ダグは明らかに苛立った。チェサは相変わらず何を考えているのかわからない。しばらくして、トバイアがリディアーヌに答えた。

「エクランド王国では、ほとんどの女性が家にいるんだ」

「えー？　女性はある、外で仕事をしないんですか？」

「女性は大切な存在だからな。いつまでも美しく、男からの愛を受け取ってくれればいい。子どもを産んでくれれば、もう望むことは他にない」

「……」

そういえば人間の世界でも同じだ。女の子は、できるだけ良家に嫁げるように小さな頃からしつけられ、無事に嫁いたら今度は子どもを産むことが使命になる。跡継ぎとなる男の子を産めば大役を果たしたと喜ばれ、女の子でも美しい子なら政略結婚に使われて重宝される。

獣人の世界も同じようなものなのかと、リディアーヌはふわふわした頭で考えていた。

「……おまえら人間が獣人のメス連れ去ったせいじゃねえか」

「え？ どういうことでしゅか？」

「ダグ、やめろ」

トバイアが一瞬、強い殺気を放つ。チェサとダグはびくんと体を揺らすとこわばった表情で前を見つめた。リディアーヌも背筋がヒヤツとし、酔いが急激に覚めていく。

「人間が、獣人の女性を連れ去ったんですか？」

トバイアはあっと深くため息をつき、ダグをじろりとにらみながら、しぶしぶ説明を始めた。

「エクランド王国のいい面だけを知ってほしかったから、あまり話したくなかったんだが……百年以上前、人間と獣人が争っていた頃の話だ。多くのメスが人間に攫われ、娼婦や見世物にされていた。そうしてメスが激減し、種族の防御本能なのか、今ではメスが生まれにくくなったんだ」

「なんてひどいことを……」

「ああ。今では、だいたい十対一の割合でしかメスがいないのが現状で、この国は一妻多夫制なんだ。ただ、一人のメスがたくさん子どもを産むから、人口自体は増え続けているよ」

「そうとも知らずに、私ったら無神経な質問を……ごめんなさい」

「ふふっ、君は素直ないい子だな。それで、ダグはどうなんだ？」

緊張したまま前を向いていたダグは、目線だけ動かしリディアーヌを見つめた。

「……」

「彼女は何も関係ない。責めても仕方ないだろう？」

「はい……」

リディアーヌはダグに謝るべきか迷ったが、謝ったところでダグの気が晴れるわけではない。それに、そもそも自分が謝るべきなのかもわからず、言葉に詰まってしまう。

「そういうわけで、いまだに人間を毛嫌いしている獣人も多い。まあ、人間も獣人を嫌っているからお互い様だな」

「そう、なんですね……」

当然のことだ。歴史がまだ新しく、わだかまりは簡単には消えない。何代にもわたって歩み寄りなければ、国交は断絶したままだろう。

「だから、君が人間だとバレるとよくない。しかも、君は処女の香りがするから、鼻の利く獣人にはすぐに気づかれてしまう」

「あ……それで手を……」

「ああ。数少ない女で人間で処女で。いろいろな意味で欲しがることが多い。そういうわけだから、身の安全のためにも一人でフラフラ出歩かないように」

「……はい」

トバイアは「よし」と頷き、少し用事があるから待つようにと言って席を立った。

リディアーヌはチェサ、ダグと残され、なんとなく気まずい空気が流れる。

沈黙を破ったのはダグだった。

「……で？ いつ人間国に帰るんだよ」

「っ、ごめんなさい」